

狂戯文集

小幸
玉泉文庫

特別
14
696
19





中
玉口
入
唐

形何と云ふ
日巻

方

千糸亭房成

此は道中屋のついでに存念のついでに

古方菴長彦房

伊達紋の竹の葉の如くはもたらあはる種也雲の中村

瑞雲の竹の葉の如くはもたらあはる種也

花山亭光馬

草の葉の二巻の如くはもたらあはる種也

瑞雲の竹の葉の如くはもたらあはる種也

龍廬屋

大入の札の如くはもたらあはる種也

日女

形を流しつゝ種もたはるの如くはもたらあはる種也

方昌園玉旅

日の風つゝ新の葉の如くはもたらあはる種也

夢翠菴有繁

いさむらひの如くはもたらあはる種也

瑞雲の竹の葉の如くはもたらあはる種也

昌錦堂世紅

イの葉を流しつゝ種もたはるの如くはもたらあはる種也

稻垣屋長秋

あはるの如くはもたらあはる種也

瑞雲の竹の葉の如くはもたらあはる種也

一陽外

いさむらひの如くはもたらあはる種也

月園菴丸

見物の如くはもたらあはる種也

瑞雲の竹の葉の如くはもたらあはる種也

唯 垣

あはるの如くはもたらあはる種也

千歳亭後古

見物の如くはもたらあはる種也

成物

和山一万五千

二醉多佳雪

定改の祇堂年や祇堂舎の山あり人のあつる中野

お打里日なをる

鶴橋春香

ふゆふゆとゆふゆの夜はゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

おのす目

直冬下

あをたつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつ

女とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつ

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

おのす目

月夜屋

春夜う宿舎とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつ

橋を仕付

流るる十首の昔はつとつとつとつとつとつとつとつとつとつ

橋を仕付

いふはつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつ

橋を仕付

いふはつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつ

橋を仕付

いふはつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつ

橋を仕付

いふはつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつ

橋を仕付

いふはつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつ

橋を仕付

いふはつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつ

橋を仕付

いふはつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつ

橋を仕付

いふはつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつ

橋を仕付

いふはつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつ

橋を仕付

いふはつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつ

橋を仕付

師のまゝの
書かす
白紙片
のまゝ

いづれも 痛の聲 しのぶ
とて 田舎

又ぬきま

いづれも 痛の聲 しのぶ
とて 田舎
いづれも 痛の聲 しのぶ
とて 田舎
いづれも 痛の聲 しのぶ
とて 田舎

いづれも 痛の聲 しのぶ
とて 田舎
いづれも 痛の聲 しのぶ
とて 田舎

いづれも 痛の聲 しのぶ
とて 田舎
いづれも 痛の聲 しのぶ
とて 田舎



屋山作
〇



屋山造
〇

大道廢れし由りまをるる麒麟の刺身鳳凰を
燈籠の松相共海に酔ひてはもたれ酒我の首を
碗より多しと管の流し舟をちとけりて故に由ん
四角ぢり如海せりていさぬさ舟の向ふも来ぬの
しけるりし松ありてむうしむもも言や狸の腹
鼓うり月差酒の瓶より免れぬしとて長き
おのりて身を定むるはなほ三てとておれか後肥
乾坤より月の洞をこりてまのまあるれの中地
大しとてまをるるのうしと長きとて幕物
大芝居大座敷の如きおれさうとて下目よめり大上老若
腫の穴は目鏡をこりておれさうとておれさうとて
も垂の醋のぬかぬかおれりしとておれさうとて大おれ
この花はさうおれさうとておれさうとておれさうとて

千両後者の如くおれさうとておれさうとておれさうとて
肖像をたてしとておれさうとておれさうとておれさうとて

関西より一とて川越の

そりまをるるおれさうとておれさうとておれさうとて

吸醋の三層おれさうとておれさうとて

源をたてしとておれさうとておれさうとておれさうとて
垂通寸をたてしとておれさうとておれさうとておれさうとて

千返書一丸題



御く後多ふうのる色給の山あはるるをしりも此
神記の書

おの凡ゆる言量よをを 兼すらるる神の記の書
下麻生邑は修田たた帝方と有る中 碓圓湯録、見へり

糸このつゆ

みそをわしり 後多ふうのる色給の山あはるるをしりも此
神記の書
おの凡ゆる言量よをを 兼すらるる神の記の書
下麻生邑は修田たた帝方と有る中 碓圓湯録、見へり

苗山

春の糸

西条中津浦

おの凡ゆる言量よをを 兼すらるる神の記の書
下麻生邑は修田たた帝方と有る中 碓圓湯録、見へり

○五車より

鶴は是王喬の鳥を然すと云ふ所の鳥也

名は揚洲の大川より有り

龜ハ別浦傳りぬりしより其の殻の紋を

かゝる龍文の板拾りぬ

○富山へ前も龍文の板拾りぬ

會々之の神の詠宣司

夜半の夢に女を置けりて其の夢を記す

家内家外の家を置けりて其の夢を記す

上の子は其の夢を置けりて其の夢を記す

夢の夢を置けりて其の夢を記す

瓜ありて其の

名ありて其の

赤も其の種ありて其の

瓜も其の種ありて其の

瓜を置けりて其の

不要の瓜を置けりて其の

用ひて其の瓜を置けりて其の

かゝる瓜を置けりて其の

瓜を置けりて其の

由三子より其の



若古、在りて是

春、部

金城の初り

陽里王の事

花野の記

大徳の麻

夏、部

比の氣

と、部

木場

秋、部

新井の里

新島

あふる

三國

手柳

勢田

七

本

山

山

柳

坂

学

中

花

山

山

山

山

布

七

冬

七

水

水

大

大

大

大

古

本

本

本

本

本

来禮辞

吾堂の来禮を... 大徳...

家もなしと始まの松蔭にありて居るまゝに
 心算花のり子機を味調りとも推の香は
 あらあ身山吹子出の代也とせん
 の本は体家一もか流念の向人
 自由自主の熟知の場所あり
 心の家也と東と方と一膳と試
 一帯り 山吹香
 若も古酒了
 大森梅子

一 私を今程山真自存の
 心算花のり子機を味調りとも推の香は
 あらあ身山吹子出の代也とせん
 の本は体家一もか流念の向人
 自由自主の熟知の場所あり
 心の家也と東と方と一膳と試
 一帯り 山吹香
 若も古酒了
 大森梅子

○双程旅の
 春の二の鬼一七
 以天とす出遊を行
 東の海は意深
 是處の真の面目
 需りては

○印十行一掃本の画

全戒巻の二巻の二巻

いしはしりかゝる心のかたき解を佛としゆとていかに

其意の心のかたき解ハ佛故にあらざる事なりし

波のするとも名を仰るる事なりし事なりし事なりし

○三子存の根をたつ画 大徳を法を説き

抑てハ心空を信ぜし事なりし事なりし事なりし

くいしはしりかゝる心のかたき解を佛としゆとていかに

○世に解の画

其の意を説き

いしはしりかゝる心のかたき解を佛としゆとていかに

其意の心のかたき解ハ佛故にあらざる事なりし

波のするとも名を仰るる事なりし事なりし事なりし

心を形よりして心空をわらふ事なりし

こゝろの解の事なりし事なりし事なりし事なりし

をいかに仰るる事なりし事なりし事なりし事なりし

天生の心ハ其意の心のかたき解を佛としゆとていかに

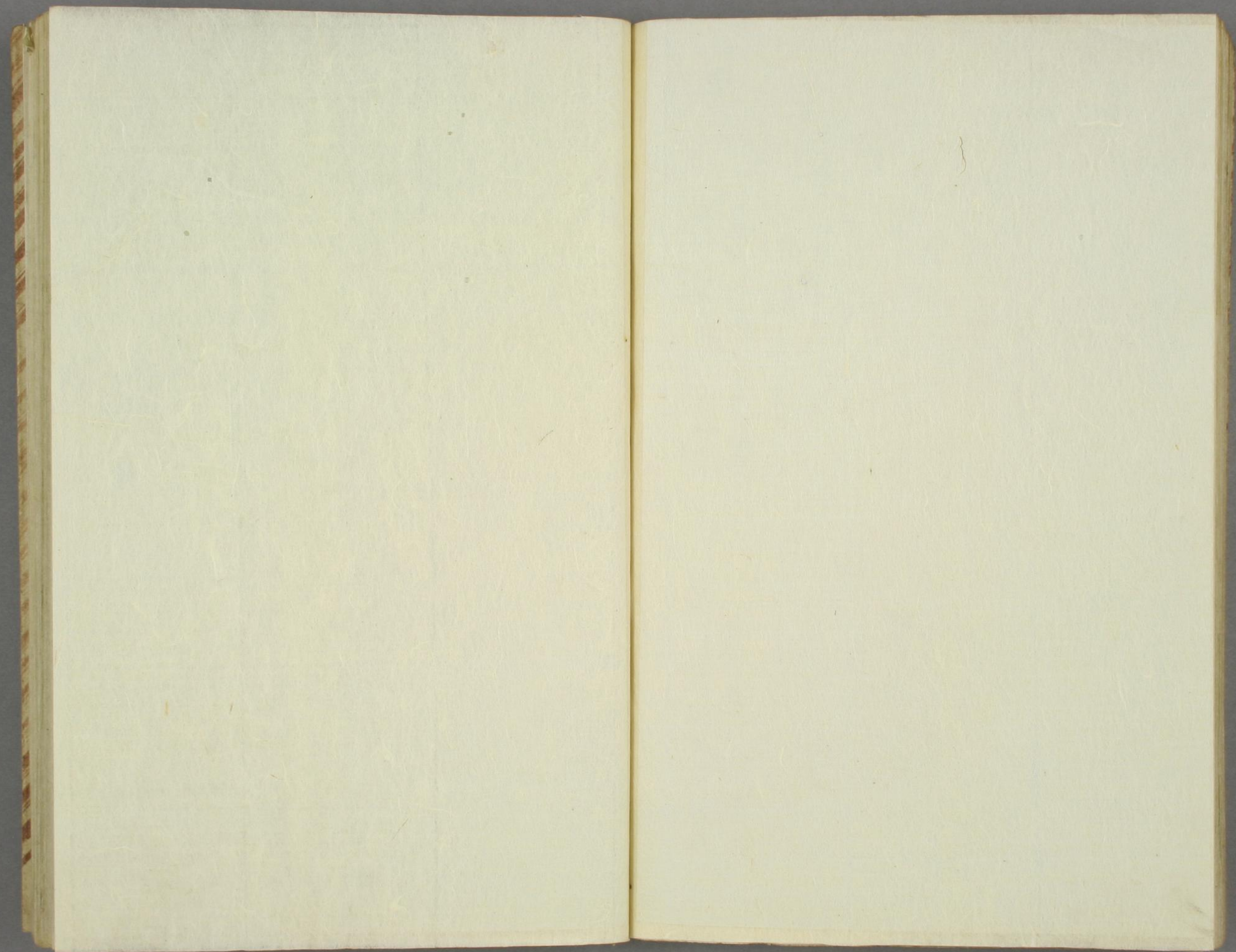
○拂子の画

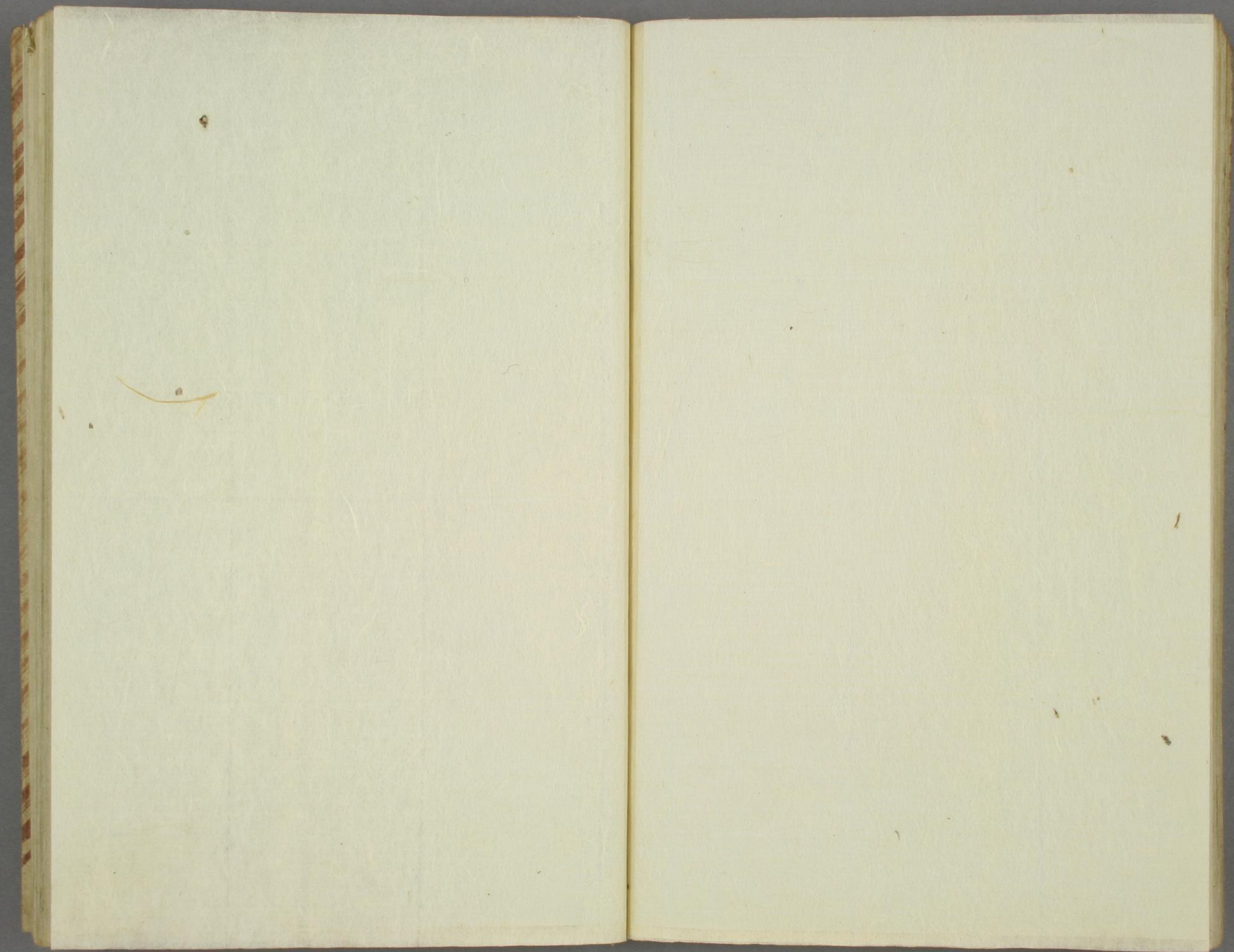
其の意を説き

いしはしりかゝる心のかたき解を佛としゆとていかに

其意の心のかたき解ハ佛故にあらざる事なりし

波のするとも名を仰るる事なりし事なりし事なりし





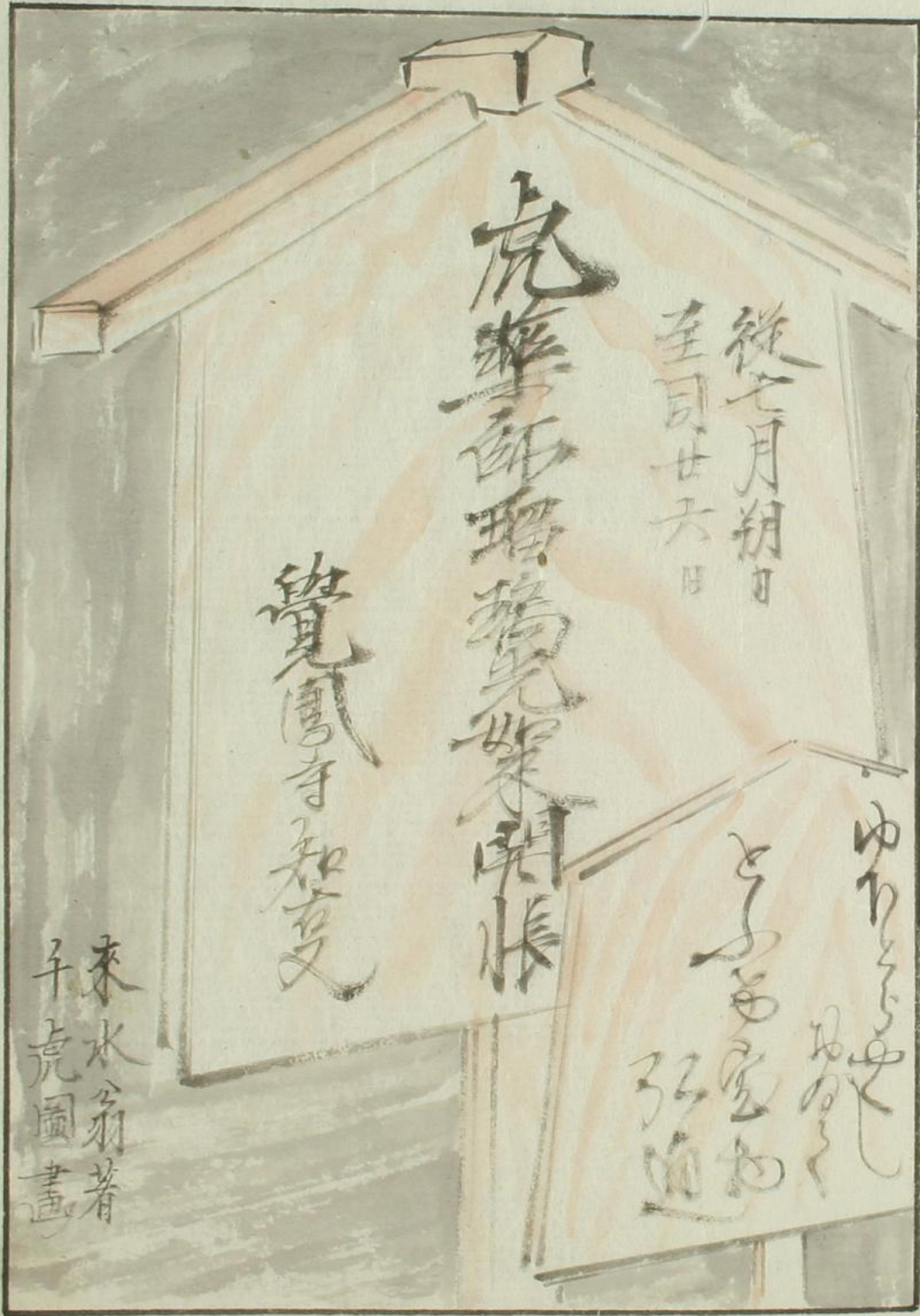


藥師衆
開帳要

道藏室物

全





若く人共相見え
 玉流 下之つた
 毎毎寶乃
 龍座





神是かゝる本道の

由来とあるはゆい

あまの金液の宝塔と燈

香車と珍とほつち

角のあつひみの

いふ飛車の古車はゆいのご好むあつひ

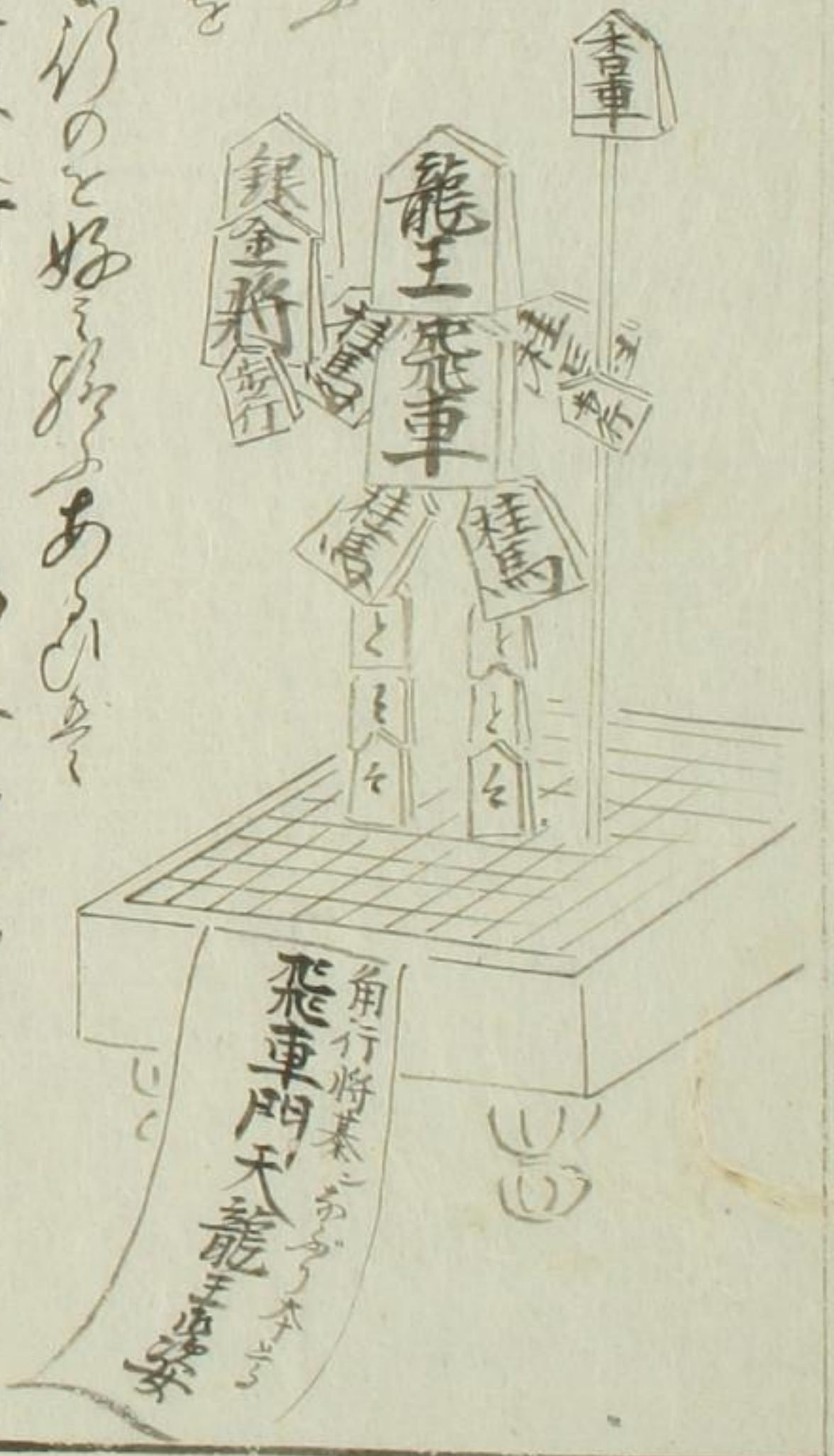
桂馬のころより今の甜食せむのこよおお基の雲流はぬ

難とちなりぐれせんとの山並願あつちも各将基の聲

とらひくもふ則言より今拜禮をさげられおつひ

拜禮うけまつりあつちのこひし

山並



是かゝる結あつちのころゆい

ゆいり本が朝暮はゆい

姫君の山並はあつち

ゆいり本はあつち

これゆいり本はあつち

子ヨウライホツへツおつち

あつちの風はあつち

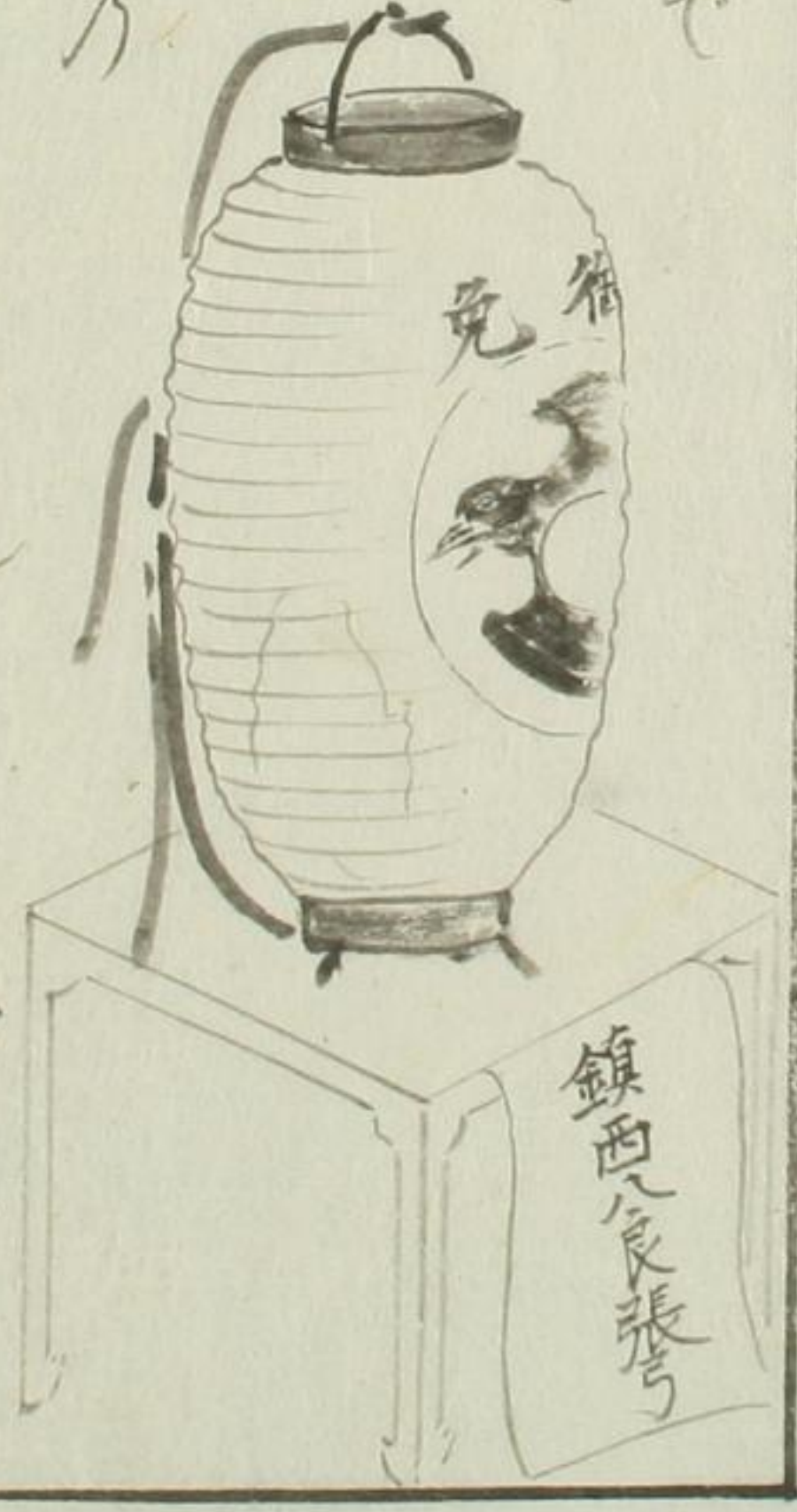
あつちの山並はあつち

あつちの腹はあつち

あつちの山並はあつち

あつちの山並はあつち

あつちの山並はあつち



あつちの山並はあつち

抑大食椀喰陣ころ右の
 由身を乃の○奉りし即年を
 十二をん古介を乃の大食を
 二その日の由をゆえあへ

仙臺侯の具をこと
 大食清の五を甲と
 息を

重層の化すの大椀と
 さらりと喰つる差か
 小すめを
 右馬の大根者よ



咽めさけけの喰川と厚も根あきげと
 箸の身 寄りの大食喰切丸とよの上白へ
 汁を入るハ給仕元の士揚桶湯と女汁次目扱
 入道と香の物三人前の抽味ゆと十二束の甚き
 汁さく ありと大食好れを何ん
 根束の洗束と根の老の致年を喰川と出
 腰尻割の揚あけんが二三あり込りハ煮二乃
 上製二ふか一ふか 時とせられし節の由甲
 四がりま才相傳とこがり本二重席の十人前の椀具是
 同化か四がり本大食の由室物あき根束あき乃
 あけら

作是ふ安主〜もろ 鯛の〜

七〜〜善哉乃

昔傳ハ長世村計屋

中世ハふか〜

上〜〜ふま〜

市中之善厚ハ人海〜

終ハ思〜ハ語ホハ上〜塩焼

味傳燒ハ昔難〜人ハ〜上〜善哉子ハ善哉子ハ〜

〜ハ〜上〜善哉子ハ〜善哉子ハ〜

乃ハ善哉子ハ〜善哉子ハ〜善哉子ハ〜

上下〜〜〜

善哉子ハ〜



Vertical text columns on the right page, including the main title and descriptive notes.

是ハ加見川中世の由事

善〜〜善哉子ハ山城

山科の田〜ハ大早カ法

給ハ血〜

〜〜

中世〜〜善哉子ハ山城

〜〜善哉子ハ山城

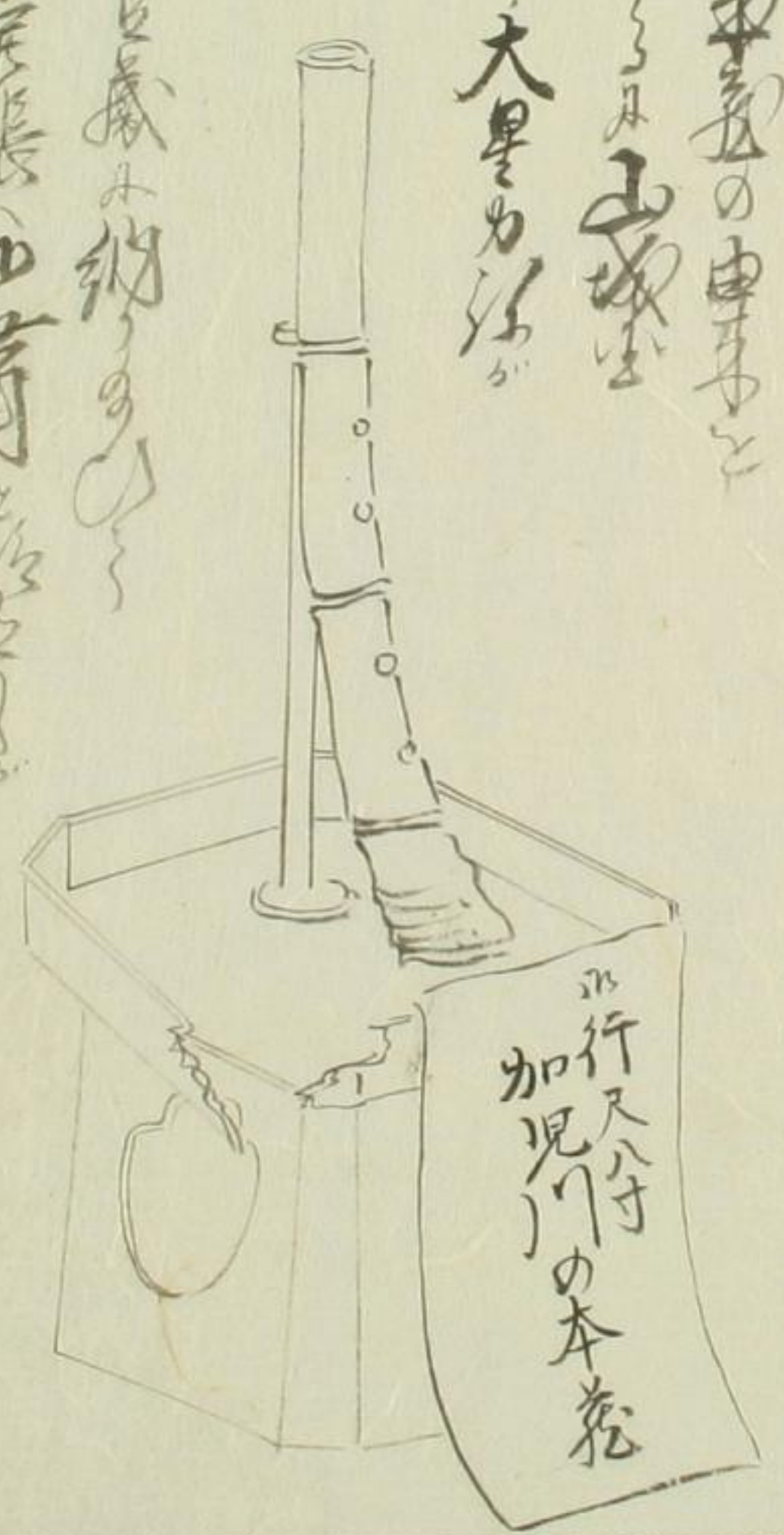
此後ハ善哉子ハ山城

〜〜善哉子ハ山城

〜〜善哉子ハ山城

〜〜善哉子ハ山城

〜〜善哉子ハ山城



Vertical text columns on the left page, including the main title and descriptive notes.

書板を... 馬上のう張り... 夫を... 既...
 神福... 時... 山... 福...
 一... 一枚... 一枚... 一枚...
 一... 一枚... 一枚... 一枚...
 一... 一枚... 一枚... 一枚...

實...
 山...

酒是...

焼酎...

丁...

永親...

比...

合...

ま...

上...

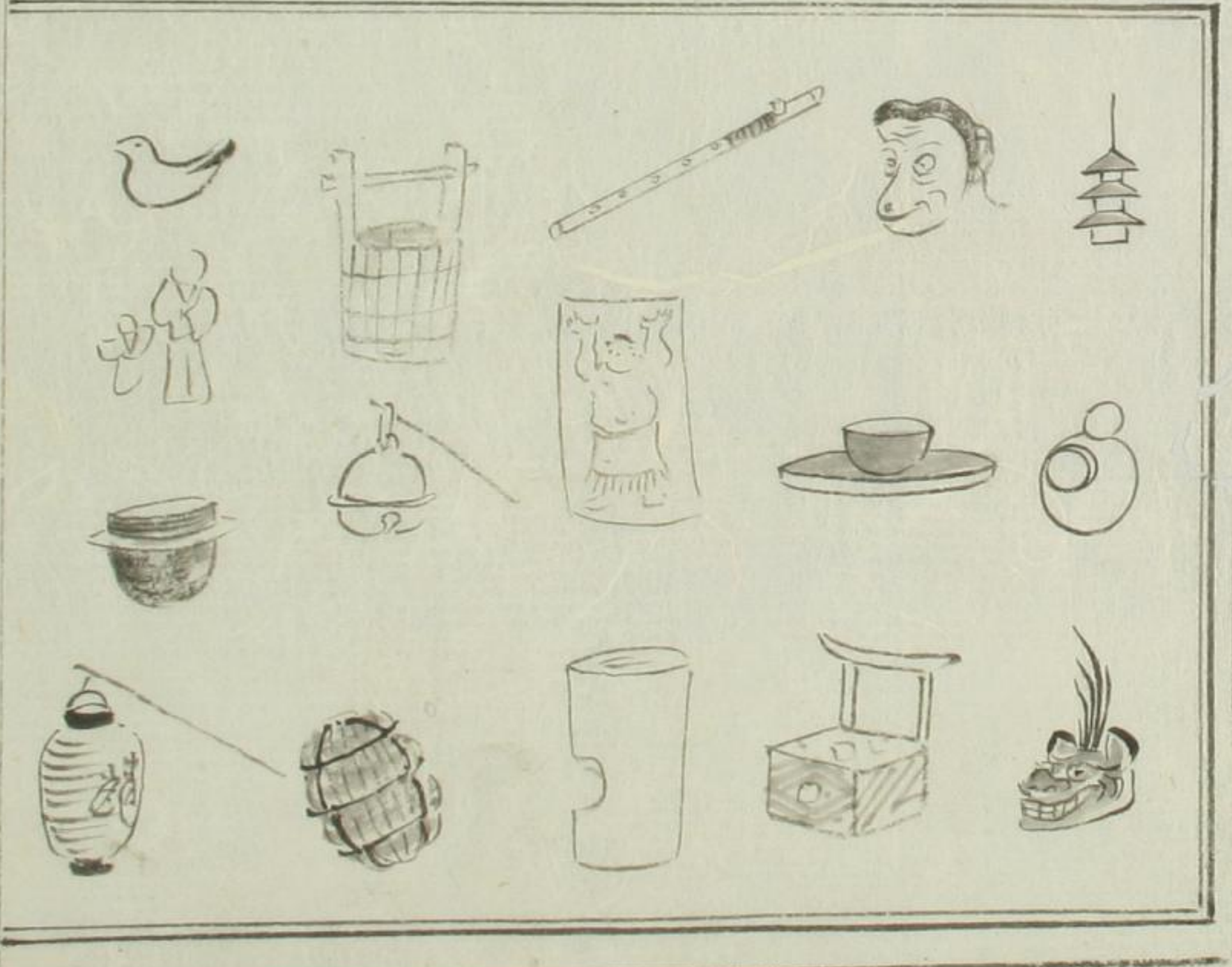
上...



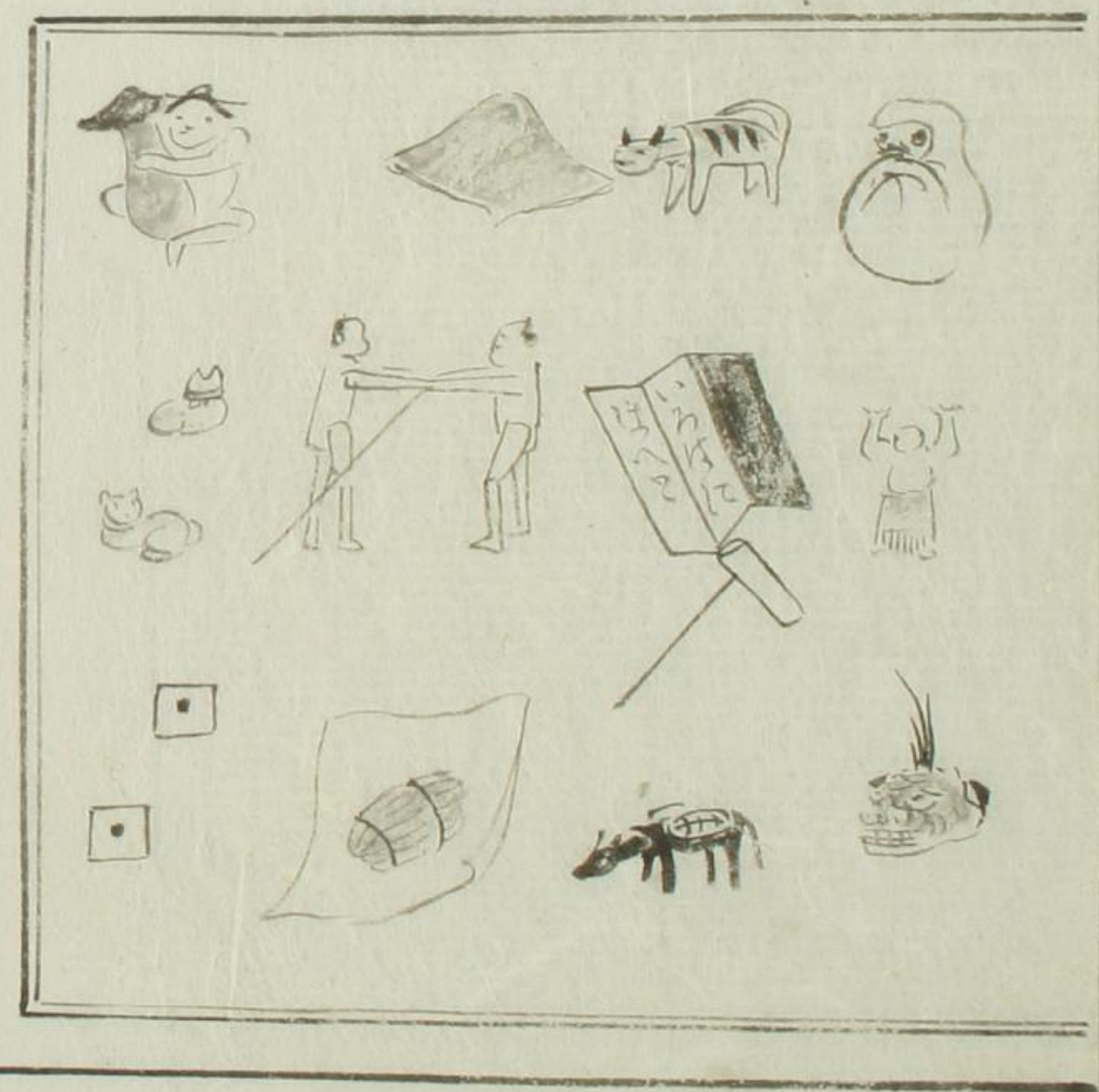
中一の葉の跡がこぼれ
 百年め乃の糸塔の道ハ血一ハ
 かくしゆ洋をあらん者さう山算加積め及ませぬと
 山算の心は是れを席へかす所の御ハ鴉乃財布
 中一もゆづりさうしれと半減りさうしれハ
 三とよかぬおれん志とさうしれハ
 乃ちや守園と山算の心はさうしれハ
 山算の心はさうしれハ

紀別高野山宝物
 石童丸将手遊
 大杖武士 加藤左衛門奉納

塔ちさな様まうのり
 柳子を藤西とと
 ちやらんのをさのゆき
 寸ちやらんのをさのゆき
 小い桶が鈴をゆき
 さうしれハ
 子供あしとさうしれハ
 お金とさうしれハ
 てちらんのをさのゆき
 大キあしとさうしれハ
 角の石とさうしれハ



因士獅子
 彼右乃踏ふ所ん
 きこらうしん
 カヤ門に投ふ
 ありしを書い
 たりしを松茸
 かき名由
 子こ



其宝
 子書圖
 子席

あまのたき

掃くまのたき

寺のたき

まのたき



草履書も替り
 今平物書も替り
 下白口も替り
 流しも替り
 ありさふ流しも替り
 宝物も替り
 今平物書も替り
 下白口も替り
 流しも替り
 ありさふ流しも替り
 宝物も替り

みの二

月がふりまわし

五尾り



